

生活保護の不受給
北九州市「孤独死」問題

市の対応「検証する」

日本共産党・仁比聡平議員の追及に厚労相答弁



ライフラインが途絶、障害者で失業し衰弱—— 保護が必要な人の最後の命綱が断たれた(仁比)

◎仁比聡平参院議員

5月23日に北九州市門司区の市営住宅で56歳の男性が、死後4か月ほど経過し遺体で発見された。

この方は身体障害者四級で、失業し、水道・ガス・電気も止められ、二度、生活保護をお願いしたが、申請書が渡されなかった。もし申請がなされ、保護を開始していたら、こんな亡くなり方をすることはなかった。

●川崎二郎厚生労働大臣

市の報告では、水道差し止めを受け、区が保健師とケースワーカーを訪問させ、近所に親族がいて定期的に援助をしていることを確認、その後、保健師が定期訪問を行ったと聞いている。

保護の適用も、親族による援助の可否をよく話し合うよう助言し、本人等は納得された事例と聞いている。

◎仁比聡平参院議員

「床をはって出てくるほど衰弱」「脱水症状で保健師に保護され」と報道にある。国として調査したのか。

●中村秀一社会援護局長

9月30日に保健師とケースワーカーが出向いて確認。親族と交流があり、身体的に問題がある状態ではない。次男の定期的差し入れの話があり、保護までにはいかなかったと聞いている。

◎仁比聡平参院議員

援助というが、4日に一

度ほどペットボトル入りの水とパンの差し入れ程度だ。(このケースは保護適用にある)社会通念上放置しがたい状態ではないか。

●川崎二郎厚生労働大臣

民生委員や保健師の対応に誤りがあると聞いていないが、今後の行政に資するため、本ケースを検証したい。

◎仁比聡平参院議員

(12月に)次男の援助がでないから、生活保護をお願いしたのに、「長男の援助をお願いしてください」と言って帰した。北九州の冬は厳しい、電気・ガスもとまっている。(死に至ったのは)保護の申請を認めなかった市の態度にはかならない。

申請権侵害が常態化

仁比議員が
是正要求

政令市の保護費(予算)伸び率(1998年と2003年対比)

札幌	35.71%
仙台	65.71%
千葉	108.09%
川崎	59.95%
横浜	50.48%
名古屋	46.77%
京都	22.75%
大阪	55.96%
神戸	54.11%
広島	58.92%
福岡	20.78%
北九州	-0.12%

北九州市の保護行政の事例

●31歳の母子家庭

母が脳梗塞で倒れ半身不随。72歳の祖母が月5万円のパート代から仕送りに。生活が出来ず保護課を訪ねたら「別れた夫に電話を連絡して面倒してもらいなさい」と言って申請書を渡さない。

●42歳女性・高校生の息子の母子家庭

母は膠原病と結核の診断で、休職中の会社を退職し保護課を訪ねた。「とにかく働きなさい。不利なことを言うと就職できないので、結核は言わない方がいいのでは」と言って申請書を渡さない。

仁比氏は、北九州市の保護行政の実例をあげ(上例)、こういう実態を国が是正しなければ、再び、三度犠牲が繰り返されること指摘。

さらに、北九州市の保護率が政令市の中で唯一低下し保護費予算の伸びもマイナスの実態を示し(グラフ)、「予算内という数値目標を定めた管理がされているとしか思えない。面接の相談記録、初期対応の時点での記録などしっかりと調査を」と、国の監査・指導を求めました。